

## 未来予想図

## 小美玉市の新たな文化づくり物語

2021年(平成33年)。来年はみのゝれが20歳を、アピオスが40歳を迎えようとしています。コスモスはこの前の7月で28歳になりました。3館がきょうだいになって15年の月日が流れました。きょうだいの結びつきはますます強くなったように思います。

相変わらず3館にはいろんな人たちが毎日にやってきます。地域の人たちばかりでなく、市外からもその魅力に惹かれて通ってくる人がいます。中には移り住んだ人もいます。

ホールに向かうのは歌の練習でやってきたコーラスのお母さんたち。ホワイエでは文化情報誌おみたマガジンの取材をしている隣で、農業関係者の跡継ぎの若い人たちがミーティングをしています。窓の外には霞ヶ浦の景色を見つめながら愛を育むカップルの姿も。ダンボールで芝生をすべって遊ぶ子どもたちを見つめながらお茶を飲んでいる若いお母さんと育児。ババ。みんな館のスタッフとも顔なじみで「やあ」「どうも」「ひさしぶり」いつもの手を挙げてのあいさつ。

予約したい2日間をうまくやりくりして分け合う方法を話し合っただけで落ち着いたようです。話し合い、互いにハッピーになる方法を考えるのが小美玉の人たちの特長です。

すっかり顔なじみの地域コミュニティのおじさんと館職員、ボランティアの人たちがいるような道具を担ぎ、車に乗せています。今から地域アクティビティに行くところのようです。今日のアーティストは、おやこDEジャズに出演しているピアニストと俳優4人組。いまやホール企画制作公演はアウトリーチに行くことが前提で創られていますから、舞台美術も仕込みとバラシが手間いらずに工夫されています。

企画運営に欠かせないポジションを体験でき、それが現実のコンサートとして本番が行なわれます。このときの体験を機に文化ホールスタッフになることを夢見て、今年から文化ホールに配属になった女性がいます。新規採用職員が文化ホールに配属されるのは小美玉市役所の特長です。文化ホールで住民参画プロジェクトを通じて磨かれた職員は、固定観念に縛られず柔軟な思考で仕事を進め、人間関係を構築するコミュニケーションに長けていて、みんなクリエイティブだと評判です。これは文化ホール職員のための充実したトレーニング・カリキュラムと、住民と新たな価値を生み出すプロジェクトを次々と仕掛けて行く現場に恵まれているおかげですね。

文化ホール職員は、新規採用職員や5年ぐらい経験を積んだ人のほかに、各館1人ずつ10年以上の経験を持つスペシャリストがいて、アートマネージャーとして活躍しています。創意工夫が地域活性化の鍵を握る文化行政の中でも、小美玉市は特に成功例の少ない住民参画型のホール運営を特長として打ち出しているため、職員が一人前に育つまでに10年かかります。住民と館職員が共創の関係を築くには、経験と想いを蓄積した専門性を保ちつつ新しい風を入れていくというバランスが大切です。

さらに、スタッフのやる気を引き出して常に住民目線で決断し、住民の力が最大限発揮できる環境づくりに奔走する館長、専門的見地で3館の活動の社会的意義を理論的に整理する文化芸術の専門家、さらには文化ホールが持つ専門性を生かして舞台技術の側面から文化のまちづくりを支える舞台技術管理マネージャーの三者は、文化ホールの元気づくりのためには欠かせない人たちです。この三者が民間登用されていることで、文化ホール職員に民間的発想と住民目線で物事を捉える力が蓄積されています。

日が暮れて、ホールに出入りする住民の顔ぶれが変わってきました。ジャージ姿の子どもたちは演劇の稽古。楽器や太鼓を担いでいる若者の姿もあります。バッグ片手にやってきた人たちは会議でしょうか。毎晩のようにいろんな会議が行われていますからね。

3館の住民参画は今も健在ですが、若干の変化が見られます。会議を仕切っているのは若い人たちです。かつてのリーダーたちの姿も見えませんが、若い人たちの活躍に目を細め



中村 哲也  
小美玉市生涯学習センター(コスモス)

## 文化ホールの主役は市民

「また10時になってしまった。」その後も話したりしないのか、立ち話が続く。毎回の会議がいつもこのような感じで終わっていた。時間がいくらあっても足りないくらい。

計画策定に係わった人たちに文化やホールについての話をしてもらおうと、きっと話がつきないほどの想いがあったり、活動的であったりというのが感じる事ができる。文化ホールに携わっている人たちは、自分で自分のやりたいことをしているだけでなく、いやそれ以上に文化ホールを盛り上げようとする、ものすごいパワーが目まぐるしく発揮することができた。

毎回の会議の中で、他の文化ホールや文化活動の話や、多彩なゲストによるお話などを聴いた中で、自分の活動はあまりにも小さく、参考とすることまでもいっていないような感じがした。

私の中で文化芸術と聞くと、どうも敷居が高いようなイメージがあったが、文化ホールでの仕事に携わるようになり、活動をしている人たちと触れ合うようになり、そのイメージが払拭された。

確かに芸術性の高い本物を観ることも大切であるが、市内の身近な文化ホールは市民のためのものであり、市民の活動の拠点として、すでに多くの市民が活動していることをあらためて認識することができた。

文化ホール3館、茨城空港も賑わいを見せている。それにも増して、空の駅にはステージも出来る予定で、市内でお客様の取り合いになってしまうのではとの心配も出てきたが、文化活動だけを取ってみても、多種多様、趣味趣向も違うので、それほど心配することもないのではとの感もでてきた。

文化ホールをどのように維持していくかで見えてきたものは、これからも文化ホールを担っていくのは、市民であるということ。そして市民との協同であり、共同である。それを続けていくことができれば、文化ホールの衰退はない。世代が変わればやることも変わり、マンネリもない。古くから携わっている人はその変遷を暖かく見守っていくことも大切である。文化ホールはみんなのものという意識で、遠い存在ではなく、足の運びやすい気軽なものであってほしい。

みなさんの心の中で、少しでも文化ホールを見てみたいという心が芽生えたら、一度来てみませんか。あなたの想うことは何もないかもしれませんが。もしかすると想像以上かもしれません。新しい自分を見つけることができるかもしれません。(ちよつと大げさかも)でも人生が変わることってあるかもよ。

この策定委員会に参加して私の好きな言葉を思い出しました。高校生時代に出会った言葉で、それは「私は誰にもできない人生を演じたい。」

ながら、意見を求められるといろんな視点からの考え方を示し、あくまでも若い人たちに決定を任せるスタンスを変えません。若い人たちはそんな彼らを慕い、なかなか引退させません。重宝されて、かつてのリーダーたちもなんだか誇らしげです。

今夜は文化ホール職員OBと住民、アーティストを交えた同窓会です。毎年行なわれていて、昔話に花が咲きます。井戸を掘り始めた人たちの苦労話は長くて、いつも時間オーバーになつてしまっていますので、コスモスの隣のしみじみの家に宿泊前提で行うことになったそうです。OBやアーティストや住民の人たちの熱い想いが、こうして今のスタッフに受け継がれています。

小美玉市の文化は、10年前に3館のリーダーたちが集まって作り出した「小美玉市まるごと文化ホール計画」に記された「ポジティブ・フィードバック」の方針に則り、3館に共通する想いを踏まえたいうで、それぞれの長所を伸ばしていく手法で個性あふれる文化ホールになりました。さらに、街中まるごと表現活動のフィールドとして活用しています。

さて、明日は「第II期小美玉市まるごと文化ホール計画」の座談会です。テーマは、「リーダーなきリーダーシップ」老舗と伝統を学ぶ。私たちのまちの文化を伝統として受け継いでいくための大切な座談会です。3館のリーダー

が集まったの研修や会議は毎年恒例になっていて、「お互いの良さを認め合いつつ、でも負けない！」と思っています。今年も10年後の未来をつくる特別な会議。しっかりとこだわって、そしてできるだけたくさんの人に参加参加してもらおうための計画づくりにしたいと思います。

